



基調講演

ロマンスの追憶が映し出す現在

60 年後に振り返る 1959 年皇太子ご成婚

ジャン・バーズレイ

ノースカロライナ大学チャペルヒル校

お茶の水女子大学ジェンダー研究所

.....
お茶の水女子大学ジェンダー研究所特別招聘教授／ノースカロライナ大学チャペルヒル校教授。『Women and Democracy in Cold War Japan』(ブルームスベリー学術出版、2014 年)をはじめ著書多数。『The Bluestockings of Japan: New Women Essays and Fiction from Seitō, 1911-16』(ミシガン大学日本研究センター、2007 年)で、2011 年の平塚らいてふ賞(日本女子大学)を受賞。ローラ・ミラーとの共編で『Manners and Mischief: Gender, Power, and Etiquette in Japan』(カリフォルニア大学出版、2011 年)、『Bad Girls of Japan』(パルグレイブ社、2005 年)刊行。

【要旨】 2019 年 4 月 10 日は、明仁皇太子と正田美智子さんの結婚式からちょうど 60 年の記念日であり、その翌月、二人は天皇・皇后位から退いた。本報告は、昭和ロマンスを追憶し、1959 年の「ご成婚」報道と、平民出身の「民間のプリンセス」に投影された希望を検証する。日本の女性誌の報道はこの「ご成婚」を、戦後の日本社会における新憲法の成果、開かれた皇室、ロマンチック・ラブの力の証として称賛した。信頼し合う夫婦であり献身的な親であり、かつ熱心に公務に取り組む美智子妃と明仁皇太子は、「マイホーム主義」と呼ばれる新しい核家族のイデオロギーを体現し、戦後の日本の家庭のモデルとなった。それから 60 年を経た 2019 年のメディア報道は、夫婦が添い遂げていることを称えつつ、ご成婚当時をノスタルジックに語っている。しかし、実のところ、そのノスタルジーからみえてくるのは過去ではなく現在なのだ。1950～60 年代の美智子妃のプリンセスとしての生き方の何を、改めて見出そうとしているのだろうか？

イントロダクション:「世紀のご成婚」を振り返る

本シンポジウム企画の起点となったのは、フランス人哲学者シモーヌ・ボーヴォワールについてのジュリア・ブロック先生の最新の研究です。ブロック先生が東京にいらして、その研究について話をしてくださることが決まった時には、とても嬉しく思いました。日本の女性文学、フェミニズム、そして最近では戦後の男女共学化の研究で知られるブロック先生には、日本におけるボーヴォワールの受容についての、さまざまな視点からの分析をお話しいたします。

私からは、ブロック先生のプレゼンテーションと「日本の女性たちはボーヴォワールに何を見たのか？」という設問について考える準備として、その対照的な事象である、1959 年のご成婚についてお話しします。

今から 60 年前の 1959 年 4 月 10 日、壮大なファンファーレとメディアの熱狂の中、民間出身の正田美智子さんと明仁皇太子の婚礼が執り行われました。この結婚は「世紀のご成婚」と呼ばれました。それから 10 年の間に、二人の間には三人の子どもが生まれ、その姿は理想の家族像となりました。皇太子妃は、主婦のモデルとなったのです。

主婦としての美智子妃のイメージの影響力を理解することは、なぜ、シモーヌ・ド・ボーヴォワールが戦後日本でこれほどの共感を得たのか、どのようにボーヴォワールの考え方が別の選択肢として受け入

れられたのかを知る手掛かりとなります。

美智子妃の物語をボーヴォワールの視点で読めば「人はプリンセスに生まれるのではない、プリンセスになるのだ」ということができるでしょう。しかし、日本において民間出身の皇太子妃になるというのは何を意味していたのでしょうか？ 皇太子妃は、どのように、中流階級の主婦のロールモデルになったのでしょうか？ このご成婚は、どのように、冷戦初期の日本においてロマンチックな愛の力と民主主義と経済的繁栄を象徴するものになったのでしょうか？ 日本人々はプリンセス美智子の姿に何を見出したのでしょうか？

今年の4月、天皇皇后の引退により平成の世は終わりを告げ、メディアは再び二人の結婚と象徴的リーダーとしての公的な役割に焦点を当てました。美智子妃の人柄や業績を称賛する書籍や雑誌が、数多く刊行されています¹。こうした出版物のありようが、多くの日本人々にとっての天皇皇后の存在の意味を示しています。二人の幸せの瞬間をとらえたたくさんの美しい写真が、称賛と懐古の情を喚起します。

皇室のロマンスについて再考し、「プリンセスになる」とはどういうことかを考察するにあたり、これらの出版物で語られている二人の出会い、「愛による結婚」に対する熱狂、そして美智子妃の理想の主婦への変容についての物語を追ってみましょう。そして、より近年の二人のイメージから、皇室が目指している方向性について考察したいと思います。

プリンセスの時代

まずは、王室の女性たちについて、冷戦時代の世界的背景をみてみましょう。1950年代は「プリンセスの時代」でもありました。実在にせよ架空にせよ、プリンセスの物語は、戦争による荒廃を経験した世界中の人々を魅了しました。誰もが皆、「プリンセスになる」ことに夢中になりました。

英国のエリザベス女王とマーガレット王女姉妹、ハリウッドスター、グレース・ケリーのモナコ大公との結婚、ディズニーのアニメーション映画『シンデレラ』、オードリー・ヘップバーンが演ずる映画『ローマの休日』のアン王女。1953年のミス日本、伊東絹子らビューティ・クイーンたちも、水着姿のプリンセスになりました²。日本では、数多くの女性雑誌が、こうしたプリンセスたちの華やかな生活ぶりや恋愛、ファッションを紹介し、読者たちがプリンセスへの憧れと共感を抱くよう誘いました³。

ここに並んだプリンセスの姿に共通しているのは、若さと美しさとファッションです。また、彼女たちには、冷戦初期に文化面で果たした政治的役割もありました。プリンセスたちは、疑いの余地なく、共産主義者ではありません。ドレスとティアラをまとったプリンセスは、性差や私有財産や君主制を否定する共産主義とは無縁の存在です。プリンセスの姿は、階級制や伝統を想起させるため、民主主義からも少し距離を取っているように見え、そこがまた魅力となってもいたようです。今日の私たちの視点は、プリンセスのイメージから、異性愛規範と多産性、人種的特権性をよりはっきりと見て取ります。しかし、1950年代におけるプリンセスのイメージは、ほかの何よりも、ロマンチック・ラブの力を象徴していたのです。プリンセスとは、

¹ 近刊書の多くには、美智子妃の言葉が人生の教訓の形で引用されている。写真集には、エレガントなドレス姿がまとめられ、当時のファッションへのノスタルジアを感じさせる。刊行書の例は、朝日新聞出版編『美智子さまの時代』（2019年）、山下晋司監修『美智子さま：素敵なお言葉 61年の軌跡』（宝島社、2019年）

² Jan Bardsley, "Miss Japan on the Global Stage: The Journey of Itō Kinuko," in *Modern Girls on the Go: Gender, Mobility, and Labor in Japan*, eds., Alisa Freedman, Laura Miller, and Christine R. Yano (Palo Alto: Stanford University Press, 2013), pp. 169-192.

³ 本報告中の冷戦期のプリンセス、ビューティ・クイーン、主婦、1959年のご成婚報道については、Jan Bardsley, *Women and Democracy in Cold War Japan* (London: Bloomsbury, 2014). の研究成果に基づいている。

さっそうと現れる白馬の王子を待つ美しい女性で、王子は彼女をお城にとめない、二人は「それからずっと幸せ」に暮らすという物語の主人公です。おとぎ話はその「それからずっと幸せ」な暮らしがどのようなものなのかは語っていません。その点は、多くのフェミニスト批評家が指摘するところです⁴。

1950年代の日本には、結婚相手を探している理想の王子、明仁皇太子がいました。皇太子は、戦後の象徴天皇制の未来を担う存在です。メディアはそのお妃探しを追いかけ、候補者についての関心を煽りました。皇太子が正田美智子さんを選んだことには、皆が驚きました。富裕層の令嬢とはいえ、戦前の身分制度でいうところの「平民」の出身だったからです⁵。

テニスコートの恋

物語の中では、明仁皇太子と美智子さんの軽井沢のテニスコートでの出会いは偶然だったと語られています。今日では、そこに至るまでに様々なお膳立てがあったことが知られていますが、当時は、この時の「ひとめぼれ」の逸話に女性たちは魅了されました。

1959年の春、日本の女性雑誌は二人の婚約の話でもちきりでした。美智子さんのシンデレラのような変身の様子を綴る記事が次から次へと書かれます。カソリック系の学校で過ごした恵まれた少女時代から、魔法のようなテニスコートでの出会いの瞬間、明仁皇太子による求愛に至るまでのすべてが記事になりました。婚約成立までの水面下での交渉、婚礼準備期間の不安と気持ちの高まり、そして二人の新居のデザインについてまでも、のぞき見ることができました。二人と同じテニスウェアはどこで買えるか、ということもです⁶。

雑誌の記事に添えられた写真は、物語を語る上で重要な役割を果たしました。最も頻繁に使われたのは、二人がテニスコートにいる写真です。さて、テニスというのはどういう競技でしょうか？ テニスは、対等なプレーヤー同士がネットを挟んでプレイする競技です。そして、近代性や国際性を連想させるスポーツです。

ここに1958年に撮影された、テニスウェア姿の明仁皇太子と美智子さんが並んで座っている写真があります。この写真からはどういう印象を受けるでしょうか？

穏やかな微笑みとくつろいだ姿勢からは、二人の若い生命力、自然に備わった自信、そして親密さが感じられます。体を寄せて近づき、一緒にいることが心地良い。お互いに一緒にいることを「選んだ」のです。この写真の二人の姿のすべてに、一体感があり、自然です。しかし、このスナップショットの魅力には、根本的な矛盾が内在します。戦後社会に約束された民主主義とジェンダー平等が、皇室の家父長制と共にあるのです。矛盾はもうひとつあります。プライベートが公にされているという点です。皇室ファンは、皇室の人々が高みにいることを良しとする一方で、その公的な姿の背後にあるプライベートな生活について知りたいと切望するのです。

明仁皇太子から美智子さんへのプロポーズの言葉が最近話題になりました。「公的なことが最優先で

⁴ フェミニストたちによる創造的破壊アプローチの子ども向け書籍は、プリンセスのおとぎ話に新しいひねりを加えている。日本では社会学者上野千鶴子の翻訳で出版された、バベット・コール著『シンデレ王子の物語』、『シンデレラ姫物語』（松香堂出版、1995年）はその例。フェミニストの日本学研究者重松セツ著・A. Das 画の *Princess Ten Ten and the Dark Skies* (Guardian Princess Alliance, 2014) は、若い読者に地球環境の保護といじめの克服について教える書である。

⁵ 美智子の父、正田英三郎は、1959年当時アジア最大の製粉会社であった、日清製粉株式会社の社長。

⁶ ご成婚についての個別の雑誌記事については、Chapter 5, “Fashioning the People’s Princess” in Bardsley, *Women and Democracy*, 2014. 参照。

私的なことは後。場合によってはお助けできないかもしれない」という言葉が伝えられています。プロポーズを受け入れた美智子さんも、公務を一番に考えることを誓います。1959年の女性誌は、美智子さんが、真心と愛をもって、王子を孤独から「救い」、「普通の」家庭を持つチャンスを与えた、と語っています。メディアにより「民間からのお妃」として創り上げられた美智子さんのイメージは、同時に、皇室と一般の人々の距離を近づけました。このような語り口は、ロマンチック・ラブを支持する人々を「国民」としてまとめ上げる働きをしました⁷。

1959年のロマンチックなご成婚に沸いた日本社会ですが、恋愛結婚がお見合いと同じくらい一般的になるまでには、戦後約20年かかりました。バーバラ・サトウが指摘するように、当時の若い人たちにとって、どこでどうやったら結婚相手に巡り合えるのかは難問でした。デートの習慣はなく、若者が自ら結婚相手を探すことに、親たちは良い顔をしませんでした⁸。とはいえ、皇太子と皇太子妃の結婚は、若者にロマンチックな夢を与え、それに続けて、新しい家族の理想像を与えたのです。

米国メディアがみる皇室女性：雑誌『Time』の視点

米国雑誌『Time』の皇太子ご成婚特集も、1950年代の日本で「プリンセスになる」というのはどういうことかに関心を向けています⁹。『Time』は、民間からのお妃誕生は米国の功績だと書いています。そして、日本の女性たちは、新憲法によってもたらされた自由を満喫していると伝えています（この点については、ブロック先生の報告で説明があります）。さまざまな職業の女性の写真を掲載し、彼女たちの積極的な社会進出を称賛します。この女性たちは、アメリカの占領政策の成功の証なのです。『Time』が指摘するただひとつの難点は、女性と共に変わろうとしない、日本の男性たちの存在です。また、民間からのお妃誕生とその愛による結婚に反対を唱える右翼グループについては、日本の封建主義の残滓であると書いています。

同じ1959年、数か月後に『Time』はイギリスのエリザベス女王の特集を組みます¹⁰。ここでの焦点はイギリス連邦「コモンウェルス」の情勢にあり、英国内でのジェンダーの政治には全く触れていません。王室が模範的な家族モデルとなっている点は称賛しています。

こうした報じ方の差は、今なお存在する、米国メディアの先入観の表れです。日本社会について報じるたびに「ジェンダーの問題」が必ずといっていいくらい話題になるのです。1993年、小和田雅子さんの皇室入りを報じた米国メディアは、やはり、日本における女性の社会的地位に触れた報道をしています¹¹。ヨーロッパの王室の婚礼の報道では、ジェンダーはさほど話題になりません。2018年のメーガン・マークルの英国王室入り、そして2019年の男児誕生の際に話題となったのは、英国社会の人種事情でした¹²。

⁷ カリスマ性を備えた現代のプリンセスは、美智子妃だけではない。「人民のプリンセス」として知られるダイアナ妃の突然の死には、英国のみならず世界中の人々が悲しみにくれた。哀悼のグローバルな広がりを分析した研究者は、「人民のプリンセス」という呼称がもたらした文化的・政治的な影響について疑義を唱えた。Mandy Merck, ed., *After Diana: Irreverent Elegies* (London: Verso, 1998).

⁸ Table 3., “Marriage Configurations in Postwar Japan” and discussion in Barbara Hamill Sato, *The New Japanese Woman: Modernity, Media, and Women in Interwar Japan* (Durham, N.C.: Duke University Press, 2003), p. 161. 参照。

⁹ “Japanese Women: New Freedoms Amid Old Customs.” *Time* (23 March 1959): 24-36.

¹⁰ “Crown & Commonwealth: Canada’s Queen on Tour.” *Time* (29 June 1959): 15-19.

¹¹ 1993年の徳仁皇太子ご成婚報道については、Jan Bardsley, “Japanese Feminism, Nationalism and The Royal Wedding of 1993.” *Journal of Popular Culture*, Vol. 31 (1998): 189-205 and Amanda C. Seaman, “Modeling Masako: Commodities and the Construction of a Modern Princess,” *Chicago Anthropology Exchange*, no. 21 (Spring 1995): 35-72. 参照。

¹² 2019年5月6日の、メーガン・マークルの男児出産後、メディアの関心は、男児の「バイ・レイシャル・ヘリテイジ」と肌の

もうひとりの民間のプリンセス:「殉国乙女」樺美智子

ここで少し視点を変えて、日本のメディア、特に雑誌『週刊朝日』が、この時期、どのように別の民主主義のプリンセス、もうひとりの美智子像を創り上げたかを見てみましょう。

社会学者ヒロコ・ヒラカワは、『週刊朝日』は、60 年安保闘争で死亡した東大生、樺美智子を「殉国乙女」に仕立て上げたと述べています¹³。樺は全学連の幹部であったにもかかわらず、『週刊朝日』は、彼女は国のために犠牲となった純真で政治には無関心の若い女性であると描き、だからこそ、日本国民は、政府による破壊を食い止め、民主主義への希望を再生しなければならないと結論付けています。平民プリンセス美智子も樺美智子も、異なる考えを持つ人々を協調的な「国民」としてひとつにまとめるシンボルとしての、性的および政治的純潔性を備えたカリスマ乙女になったのです。ヒラカワはまた、『週刊朝日』は、女性の使命は出産・育児であると位置付けたうえで、樺がそれに伴う母性の喜びを享受する機会を失ったと論じている、と指摘しています。

ヒラカワは、1990 年に、フェミニストの女性たちが 60 年安保をどのように回顧するかを調査し、1960 年に 15 歳以上であった女性たち 450 人に、最も強く記憶に残っていることは何かと質問しました。美智子という名前の二人の女性、という簡潔な回答が大多数でした。この調査は、回答した女性たちが、この二人の女性についてどう理解しているかや、どのように二人の違いをみているかは明らかにしていません。いずれの美智子の報道においても、乙女の純潔性や政治的な汚さとは無縁であること、皆の利益のために「国民」が団結することを促す存在であること、が強調されました。そして、二人のセクシュアリティについては、結婚や、母になるという最終目標が示唆していました。

プリンセス主婦・ファッションアイコン

プリンセス美智子は母になりました。母親という地位を得ることで物語は新たな展開をみせ、愛による結婚に続き、1960 年代高度経済成長期の戦後家族のモデルとしての立場が確立されました。

先ごろ天皇に即位した徳仁親王の誕生は 1960 年 2 月。皇室の伝統によらず、母乳育児をしたり、自らの手で息子を育てることを選んだというのは、よく知られた話です。公務で旅行に出る前に書いた、親王の世話係への申し送りのメモは、後日取りまとめられ、『ナルちゃん憲法』のタイトルで出版されました。ベン・ヒルズは、日本の人々は、「皇室が初めて自分たちと同じ育児の問題に悩んでいることに好奇心をそられた」のではないかと述べています¹⁴。

お茶の水女子大学の社会学者、坂本佳鶴恵は、近刊の女性雑誌の研究書で、1960 年代の美智子妃と皇太子一家についての大量の記事を分析しています¹⁵。その分析から、美智子妃が母親になって記事の焦点が推移したことが明らかになりました。1959 年には、美智子さんの知性や皇室に相応しいかどうかが話題でしたが、『主婦の友』などの雑誌は、母親としてのスキルの高さを称賛するようになります。写真に写されるのは、一家の中心にいる母としての姿です。ひとりだけで撮影されることはめったになくなりました。

皇太子一家についての記述では、責任のジェンダー分業が強調されます。明仁皇太子は公務に励

色に移行した。

¹³ Hiroko Hirakawa, "Maiden Martyr for 'New Japan': The 1960 Ampo and the Rhetoric of the Other Michiko." *U.S.-Japan Women's Journal*, 51 (2017): 12-27.

¹⁴ Ben Hills, *Princess Masako: Prisoner of the Chrysanthemum Throne* (New York: Jeremy P. Tarcher/Penguin, 2006).

¹⁵ 坂本佳鶴恵『女性雑誌とファッションの歴史社会学:ビジュアル・ファッション誌の成立』(新曜社、2019 年)。戦後雑誌における美智子妃表象については第 5 章参照。

み、子育ては安心して妻に任せています。美智子妃についての話題は、子育てや家事といった家庭内の仕事一辺倒です。仕事に集中する夫と子育てに専念する「専業主婦」の妻という皇太子夫妻の姿は、高度経済成長期の「マイホーム」イデオロギーの象徴です。美智子妃の家庭生活の様子を伺うと、プリンセスはまるで一般家庭の主婦のようです。一般家庭の主婦にとっては、それが自分の魅力を高め、主婦の立場は重要なのだと思わせてくれます。一般家庭の主婦もプリンセスも、家庭では同じ責任を担っているのです。

家族のために料理をすることを楽しみ、ほかの家庭と同じような普通の子育てをする美智子妃についての報道は、皇太子一家を、完璧な中流家庭であるかのようにみせています。坂本は、この時期、美智子妃と皇室の間の不和についての報道がまったくなかったことを指摘しています。実際には、いじめのような経験をしたことが明らかになっています。また、子育て以外の事柄についての報道は、まったくみられないのです。

坂本は、美智子妃のファッションセンスに注目が集まったことについても述べています。その様子は、以前の皇室女性の報道とは少し趣が異なります。写真に添えられた文章が、着用しているものについて詳細に説明し、ファッショナブルな服装をすることも、プリンセスになるということなのだと示しているのです。美智子妃に関する近刊書籍のいくつかは、美智子妃のワードローブについて、ノスタルジックに振り返っています¹⁶。ロールモデルとしての美智子妃は、「エレガントな主婦」のイメージも提供しました。

1964 年頃に撮影された写真のなかに、公的な場に出る装いの美智子妃が、幼い徳仁親王の手を引いている写真があります。この姿は誰かに似ているのですが、誰でしょうか？

この美智子妃と徳仁親王と一緒に写っている写真をアメリカで見せると、「ジャッキー・ケネディみたい」という反応が返ってきます¹⁷。もしかすると、そういうイメージを描き出すことが、撮影者の狙いだったのかもかもしれません。正確な日付はわかりませんが、1964 年頃の撮影だと思われます。ケネディ大統領暗殺から間もなくの時期ですね。ジャッキー・ケネディのスタイルに似た服装で幼い息子の手を取る美智子妃の姿は、世界中から称賛と好意が寄せられた、大統領暗殺後のジャッキーと息子の姿に重なります。ある意味、この写真の優雅な装いのプリンセスは、60 年代の高度経済成長により裕福になり、アメリカと肩を並べるまでになった日本を表象しているのです。

天皇と皇后としての公的役割

平成の時代には、天皇皇后がパートナーとして共に行動する様子を捕えた写真が数多く撮影されています。自然災害の被害者を気遣う様子を写した写真には、文字どおり、二人が国民に寄り添う姿があります。例えば、2011 年 3 月の東日本大震災の報道写真では、二人は、避難所の床に膝をついて、被災者と同じ目線の高さで言葉を交わしています。

私の「プリンセス」についての研究は 50 年代の事象に焦点を当てていますので、近年のことについてはあまり目を向けていませんでした。しかし、この春目にしたニュース映像で強く印象に残ったのは、二人

¹⁶ 美智子妃のファッションを称賛する書籍については、双葉社編『美智子さまご洋装の輝き』(2017 年)、別冊宝島『美智子さまの 60 年 皇室スタイル全史 素敵な装い完全版』(2018 年) 参照。

¹⁷ Stella Bruzzi はジャッキー・ケネディの装いの象徴性について分析し、特にジョン・F・ケネディ暗殺当日に着用していたスーツについて、「トラウマと喪失の記憶をノスタルジックに思い起こさせる」と解説している。“The Pink Suit,” Chapter 17 in Stella Bruzzi and Pamela Church Gibson, eds., *Fashion Cultures Revisited: Theories, Explorations and Analysis* (New York: Routledge, 2013). 参照。

が近く寄り添って歩く様子です。あたかも、絆を確かめ合っているかのようです。

美智子皇后はまた、戦時中に日本が行った侵略行為への償いをしようとする夫を無言で支えるパートナーでもあるようです。2018年の沖縄訪問の写真からは、その様子が見て取れます¹⁸。

退位と皇室の将来

退位への準備が進む中、二人の長きにわたる結婚を祝う動きもみられました。書店の店頭には、天皇皇后の、または、美智子皇后の写真を表紙に使用した書籍が並べられていました。週刊誌の皇室ゴシップ特集の中吊り広告も、電車内で目にしました。特に若い世代の皇室メンバーのゴシップが多かったようで、美智子皇后はどちらの側か、といった推測記事もありました。しかし、美智子皇后と明仁天皇には、何事にも動じることのない落ち着きと、どこまでも人に寄り添う雰囲気があります。

日本の皇室の将来はどうなるのでしょうか？

5月1日の新天皇即位は、再びジェンダー不平等の問題に注目が集まる機会になりました。皇居で行われる重要儀式には、成人男性皇族のみが参加を許されています¹⁹。そして、女性の皇位継承権についての検討は保留されたままです。こうした女性に対する制約については、国内外のメディアが報じています。皇室内のジェンダー不平等から連想されるのは、日本の2018年ジェンダー・ギャップ指数の順位の低さです。社会学者山口一男は、「149か国中110位というひどい結果」であったと評しています²⁰。先進諸国の中で最低順位であることは毎年のことですから、日本のプリンセスや皇室が話題になるとき、世界の目が日本の「ジェンダー不平等の問題」に向けられるのは必然的です。未だに、『Time』誌が記事にした1960年の様子と同じです。

皇室の将来像について、皇室内のジェンダー平等を実現させるというのは有効でしょうか。君主制というのは、突き詰めていうと、過去の遺物、別の時代の遺品です。不平等や人種の特権性、強制的異性愛の具現です。そして、ひとつのロマンチックな物語だけでそれを変えるというのは不可能です²¹。

とはいえ、プリンセスの物語は私たちを魅了し続けるでしょう。主人公はいつも女性であり、個人の力で変化を起こせると思わせてくれます。プリンセスの物語で最後に勝つのは、善良な女性です。ここに、明仁皇太子と美智子さんの物語への、ノスタルジアの盛り上がりの起因があるのではないかと思います。

¹⁸ “Emperor, empress visit Okinawa to commemorate war victims.” Kyodo News. 27 March 2018. Accessed 27 May 2019. <https://english.kyodonews.net/news/2018/03/77f2f79f748d-emperor-empress-visit-okinawa-to-commemorate-war-victims.html>

¹⁹ “Female Imperial family members to be barred from key succession rite in line with Japanese law.” *The Japan Times*. 17 January 2019. Accessed 30 May 2019. <https://www.japantimes.co.jp/news/2019/01/17/national/female-imperial-family-members-barred-key-succession-rite-line-japanese-law/#.XO8liogzYuU>

²⁰ 山口は、女性の大多数が「非正規雇用」で働く構造が巧妙に作られていることが、「男女間の大きな賃金格差」をもたらす根本原因であると指摘している。Kazuo Yamaguchi, “Japan’s Gender Gap.” *Finance & Development* Vol. 56, No. 1 (March 2019). Accessed 27 May 2019. <https://www.imf.org/external/pubs/ft/fandd/2019/03/gender-equality-in-japan-yamaguchi.htm>

世界経済フォーラム「ジェンダー・ギャップ・レポート2018」 Accessed 20 April 2019. <https://www.weforum.org/reports/the-global-gender-gap-report-2018>

²¹ Takashi Fujitani は、「ヴィクトリア女王の統治下で、帝国の拡大と女性の選挙権の否認の矛盾が問題視されなかった」と「家庭第一主義信奉」の興隆があったことを指摘し、女性の皇位継承権を認めることが必ずしも社会における女性の機会の向上を保証するわけではないと論じている。“Imperial Succession Panic: The Politics of Gender, Blood and Race in Contemporary Japan” in Amy McCreedy Thernstrom, ed., *Japanese Women: Lineage and Legacies* (Washington, D.C.: Woodrow Wilson International Center for Scholars, 2005), p. 32.

テニスコートの恋へのノスタルジア

プリンセス美智子のテニスコートの恋の物語へのノスタルジアが示すのは、1959 年の「愛による結婚」という夢です。二人は人々に、物事は「変えられる」、そして、ロマンスと結婚は両立する、という希望をあたえました。プリンセスは変化を起こすことができるのです。将来のシンボルとなるものは何で、どのような精神的絆が変化の原動力となるのでしょうか。

美智子さんはプリンセスに生まれた訳ではありません、でもプリンセスになりました。1960 年代に美智子妃がエレガントな「プリンセス主婦」に変容する姿を伝えたメディアは、美智子妃と、彼女をロールモデルと仰いだ主婦たちにそのような歩みをとらせたのは何か、ということは考えません。メディアは、美智子妃の、妻そして母としてのスキルの高さを、それが家庭や日本の民主主義を強化する上での女性の使命であるとして称賛したのです。これに対して、シモーヌ・ド・ボーヴォワールらフェミニストの哲学者は、ジェンダー規範の社会的構築に批判的な視線を向け、「女になること」について問いかけました。それでは、日本の女性たちがそのボーヴォワールの言葉をどのように受け止めたのかについての、ジュリア・ブロック先生の研究報告をお聴きください。

謝辞: シンポジウム運営を担当して下さった吉原公美 IGS 特任リサーチフェローに、知的刺激に満ちた発表をして下さった、ジュリア・ブロック先生、北村文先生、ゲイ・ローリー先生、そして円滑に議論を進めて下さった司会者の大橋史恵先生に、感謝申し上げます。